

## 国際舞台で都市デザイン研アピール

### イタリア・ワークショップ、盛況裡に閉幕

9月20日から10月1日まで、イタリアのセルモネータという都市で、East/West The Living Historic City（現代に生きる歴史都市—東洋・西洋）というワークショップ（以後WS）が行われました。デザイン研は、学生・西村幸夫教授の総勢13名で参加。他には、台湾・中国・ドイツの教授や学生、プレス、イタリアのゲストの方々が参加していました。（M1 江口久美）



■セルモネータ・石畳の市街



■WS発表の様子



■城のある丘から望む夕焼け

セルモネータは、ローマから70kmほど離れたところに位置する、中世都市です。平野の中に、忽然とそびえ立つ山のいただきに、この都市はあります。周辺には、オリーブ畑が広がっており、常に地平線を望むことができました。自然と人工との対比を象徴するかのよう、一步都市に入れば、石畳の迷路のような町が広がっています。最初の日、夜遅く、土砂降りの雨の中、このまちにたどり着いた私は、一瞬夢の中にいるかのように思いました。その後、驚いたことに、まちの一番高い所に聳えるカエタニ城まで、20kg近い自分のスーツケースを運ぶはめになりました。そこが宿泊場所だったからです。

このWSは、ドイツのアーヘン工科大学のヤンセン教授によって主催されました。1日目、私たちは都市デザイン研に関して発表し、良いコメントをいただきました。その後2、3日にわたり、ニンファの庭、アラトリなどの中世都市、ローマなどを訪れました。この日々を通じて、各自は次第に打ち解けていきました。

後半では、各国混合の7チームに分かれ、セルモネータの4つの対象地に関して、分析・提案を行いました。それぞれの班は個性豊かで、城壁の跡地を公園として再生したもの、城の庭園を新しい市民の庭として開放するもの、廃墟に道を通して住宅地に再生し直すもの、などがありました。

最終日、楊・竹山・柴田・江口はピアノを弾き、皆で各国の歌を熱唱しました。とくに楊のさくら（森山直太郎）は、私たちのテーマソングになりました。楊・江口は浴衣も着ました。（笑）途中、西村先生が予定の時間になっても戻らず、日本大使館に連絡するというハプニングもありましたが、とくに何事もなく無事にWSは大盛況に終わりました。



### <WSを振り返って>

- 「歴史的な都市の面白さを再発見」（黒瀬 M2）
- 「瞼に挟んで持って帰りたいくらい景色がキレイでした☆」（竹山 M1）
- 「新しい友達、見たことのない風景、「世界一」の Pasta とピザ。ああイタリア最高」（楊 M1）
- 「『古城が家、町が庭』のような幻想を抱けた日々だった」（鈴木 M1）
- 「…」（WS 後ヨーロッパ放浪旅行中のためコメント取れず）（三沢 M1）

## 京浜プロジェクト・チーム、北欧に飛ぶ

9月5日、黒瀬 M2・柴田 M1 は、イタリア WS の開幕に先駆けて渡欧。京浜臨海工業地帯プロジェクトのための、ウォーターフロント開発事例調査として、北欧・ドイツを回った。2人は2週間の行程ののち、アルプスを越えてイタリア WS に合流した。(M1 柴田直)

9月6日朝、ストックホルム・アルランダ空港到着。冷気と、北欧らしい空気(人工物(空港エントランス前の螺旋型立体駐車場)と自然物の距離感)に息を飲む。事前に聞いていた物価高を目の当たりにしへこむ。訪問した都市は順に、ストックホルム、オスロ、マルメ、コペンハーゲン、ハンブルグ。

### 容赦ない開発の勢い実感

いずれも容赦のない開発に勢いを感じる。個人的には、(プロジェクトオフィスの方にヒアリングが出来たこともあり)ハンブルグの HAFEN CITY に魅力を感じた。行政がジョイントベンチャーという形でプロジェクトマネジメント(以下 PM)オフィスを立ち上げ(このオフィスは民間企業)、行政内のセクターと連携を図っていることに強く興味を覚えた。これは日本ではありえない。

PM 自体も時間経過、既存市街地との相互関係性、サイト内での役割分担などがよく考えられており、組織としてもうまく機能していることがうかがえた。今後の開発のポイントは、将来のランドマークとなるヘルツォーク&ド・ムーロンのリノベーションやレム・コールハースの集合住宅。

17日に調査終了、20日朝のローマ入り・合流を目指す。ドイツを転々としつつ19日にミュンヘン着。オクトーバーフェストに盛り込みをかけ、21時の夜行へ飛び乗った。



■ストックホルム・ハンマルビー



■コペンハーゲン・王立図書館



■ハンブルグ・HAFEN CITY

### 新入生紹介 (前編)

10月から新たに研究室に加わったメンバー、2回に分けて紹介します。



◆永瀬節治 (D1) 兵庫県出身、東北大学大学院修了。ディベロパーへの就職内定を振り捨てて、オリジナルの「かいまみ景観」研究続行のためにデザ研博士の道を選ぶ。「交換可能な社会の一歯車となることに疑問を感じたので。紆余曲折あってデザ研に来ましたが、これからも手探りでやってゆくことになりそうです」

◆後藤健太郎 (M1) 岐阜県出身、京都大学卒業。修士課程では、中世イタリア・シエナにおける高層建築撤去について研究予定。「論文のほかに、まちの現場へ出てゆくプロジェクトに積極的に参加したい」との言葉どおり、入学間もない先10月10・11日に八尾プロジェクトの現地調査に参加。(写真は、長瀬・後藤両名が参加の八尾プロジェクト・ミーティング)

◆Mathias Dietsche (研究生) ドイツ・シュトゥットガルト大学出身。一学期を過ごしたチリ・サンチャゴの一地区を卒業設計対象として選んだ国際派にして、来日時に60キロ超の荷物(+ガールフレンド!)を抱えてきた偉丈夫。「まずは日本語から。1年間の滞日で何ができるか、考えてゆきたい」

### 編集後記

初めて引き受けた全面編集の作業が終わって一息ついたところに、イタリアからの絵葉書が届いた。裏面に映るカプリ島の陽光にもまして、旅の昂揚を伝える諸姉の筆致がまぶしい。旅はいいですね。都市をやる者は、引きこもってはいけません。イタリアの余韻醒めぬWS組の帰国、留学生の来日、新入生の加入で、院生室はいっそう過熱、過密。いざ、新学期スタート。WS後にイタリアを回った旅行記は、次号に掲載予定。乞うご期待。(坂内)